

かわ ばた あい こ  
川 端 愛 子

学位の種類 博士(教育情報学)

学位記番号 教情博 第 18 号

学位授与年月日 平成 24 年 3 月 27 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育情報学教育部(博士課程後期 3 年の課程)  
教育情報学専攻

学位論文題目 子育て・教育支援に関する教育工学的研究  
ー関係力育成プログラムに対する  
PF－NOTE プロトタイプの活用ー

論文審査委員 (主査)  
教授 渡部 信一 教授 熊井 正之  
准教授 中島 平  
教授 後藤 守  
(北海道文教大学)

## 〈論文内容の要旨〉

本論文は、子育て・教育支援のために開発された「関係力育成プログラム」の実践を、反応収集提示装置「PF-NOTE プロトタイプ」を活用して評価し、この指導法の有効性と、分析法として採用した PF-NOTE プロトタイプの活用の有用性を明らかにしたものである。「関係力育成プログラム」は、障害のある幼児のために開発された「行動空間療法」をベースにして構築されている。分析のツールに用いた「PF-NOTE プロトタイプ」は、収録したビデオ映像を視聴しながら臨床実習生がリモコンでマーキング情報を記録することができるというシステムである。ここでは、「関係力育成プログラム」が重視している「行動の流れの中で捉える」、「関係的視点から子どもの行動を捉える」、「構造化された場の構築」の 3 つの視点に耐えうる分析法としている。

本論文は、4 つの研究から構成されている。

研究1は、「子育て・教育支援における評価方法の教育工学的研究」として、本論文の第1章に掲載した。ここでは、関係力育成プログラムの実践を素材にし、臨床実習生グループを対象にPF-NOTEプロトタイプを使ったデータ収集を行った。

研究の結果、関係力育成プログラムによる子育て・教育支援活動の評価方法として、PF-NOTEプロトタイプの活用の有用性が明らかにされた。

研究2は、「臨床観察法におけるPF-NOTEプロトタイプの運用効果」として、本論文の第2章に掲載した。ここでは、関係力育成プログラムの実践を素材にし、大学院に在籍する小中学校の現職教員を対象にして、PF-NOTEプロトタイプを活用し、その運用効果を検討した。臨床実習生が小学校特別支援学級児童を対象に実施したグループ指導を自分たちでビデオ撮影し、PF-NOTEプロトタイプを使って児童の観察を行った。

その結果、このPF-NOTEプロトタイプを活用することによって、何に注目して見るのかという意図を持ち自覚的に集中してよく観るという「意図的観察」を行えるようになること、そして、同じ観察対象であれば何度見ても同一の一貫性のある観察値を出すことが求められる「個人内一貫性」について、自発的に臨床実習生が気づけることがわかった。また、臨床実習生が他者の観察結果を認識し、その理由について焦点化したディスカッションが可能となっていることが明らかにされた。

研究3は、「文教ペンギンルームにおける実践的研究」として、第3章に掲載した。この研究は、北海道文教大学子育て教育地域支援センター（通称文教ペンギンルーム）をベースにして進められた「教職を目指す学生の行動観察力の育成」を目的とした研究である。ここでは特に、PF-NOTEプロトタイプを用いて関係力育成プログラム実践について臨床実習生グループと熟達者の可視化資料の比較分析をした。ここでは、特に、両者が特徴的に異なる、場面3の可視化資料のグラフに着目した。

その結果、臨床実習生グループは活動のエピソードを重視しているのに対して、熟達者は場と活動の流れを重視していることが明らかにされた。

研究4は、「ミュージックセラピーの振り返りにおけるPF-NOTEプロトタイプの活用に関する実践的研究」として第4章に掲載した。ここでは、障害児の母親支援を目的にして、関係力育成プログラムの考え方をベースに、独自に開発したミュージックセラピー「ミュージック・リフレッシュ活動」による実践の成果をPF-NOTEプロトタイプを用いて検証した。本研究では、母親Aを対象にし、半年間の時間的間隔において、「PF-NOTEプロトタイプ」を活用して、肯定的な側面に焦点化した実践の振り返りを進めた。ここでは、セラピー開始1年後に実施した、「ミュージック・リフレッシュ活動」実践発表会のビデオ映像を振り返り資料とし、「PF-NOTEプロトタイプ」を活用して「いい場面」と思われるところをクリックさせ可視化資料を作成し、それに基づいて

半構造化面接を実施した。半年後、同一ビデオ映像を用いて、「いい場面」と思われるところをクリックさせ可視化資料を作成し、同様に、半構造化面接を実施した。

その結果、セラピー開始1年後の振り返り（40回セラピー実施）において自己受容の高まりが認められ、さらに半年後の2回目（22回セラピー実施）の振り返りでは他者受容を含む受容の深まりがあった。また、半年後においても、その効果を持続性させる可能性が期待できた。

その一方で、PF-NOTE プロトタイプの利用に関する課題性が明らかになった。半年間の時間間隔をおいた PF-NOTE プロトタイプによる分析結果では、ほぼ2つの可視化資料共に、ほぼ同様の特徴的なグラフが描かれていた。しかし、半構造化面接では、初回の面接内容以上に、第2回目の面接において、自己・他者受容力が高まっている内容が報告されている。このことから、PF-NOTE プロトタイプの利用にあたっては、グラフ化された可視化資料の形式的な読み取りに留めずに、これを足掛かりに、さらに掘り下げて情報を収集する必要があることが考えられた。今回の研究では、この可視化資料を足掛かりにして、ピンポイント的に半構造化面接のテーマを設定し、この分析法のさらなる活用の方途を明らかにできた。

以上述べた4つの研究から、子育て・教育支援の取組に関する「関係力育成プログラム」の有効性とその実践に対する「PF-NOTE プロトタイプ」の活用の有用性及びこのツールの持つ課題性が明らかにされた。

## 〈論文審査の結果の要旨〉

論文審査は、1月22日（日）14時から、主査・渡部信一教授、中島平准教授、熊井正之教授、および外部審査員として北海道文教大学・後藤守教授を審査員として実施された。最初に川端愛子氏本人から20分の本論文の内容についての説明がなされ、その後、30分にわたり質疑応答が実施された。特に、予備審査で問題となった4点について、どのように修正・加筆されたかについて質疑応答が実施された。

本論文は、子育て・教育支援のために開発された「関係力育成プログラム」の実践を、反応収集提示装置「PF-NOTE プロトタイプ」を活用して評価し、「関係力育成プログラム」の指導法としての有効性を明らかにし、それと同時に分析法として採用した PF-NOTE プロトタイプ活用の有用性を明らかにしたものである。

ここでは、「関係力育成プログラム」が重視している「行動の流れの中で捉える」、「関係的視点から子どもの行動を捉える」、「構造化された場の構築」の3つの視点からの検討を中心に行ってい

る。

1月7日(土)に行われた予備審査では、次の4点が問題となった。PF-NOTE プロトタイプを活用することのデメリットについても明記すること、なぜ「関係力育成プログラム」の評価にPF-NOTE プロトタイプを導入したかを明記すること、PF-NOTE プロトタイプは「関係力育成プログラム」のどの部分の評価に役立っているのかを明記すること、そして第4章の「ミュージックセラピーの振り返りにおけるPF-NOTE プロトタイプの活用」に関して目的と方法の記述・表現がわかりづらいので再度整理することが求められた。

本審査会では、この4点が適切に修正・加筆されていることを確認した。

本論文は、子育て・教育支援という実践現場に、新しく開発されたテクノロジーを導入しそのメリットとともにデメリットを明らかにしたという点において評価できる。本論文で取り上げられた実践は「関係力育成プログラム」というひとつの実践方法であり、またその評価に活用されたテクノロジーもPF-NOTE プロトタイプひとつであったが、今後同様な研究をする場合のひとつのモデルになる研究として評価できるという点で十分博士論文としての基準を超えているとの4審査員の一致した意見を得た。

よって、本論文は博士(教育情報学)の学位論文として合格と認める。